

いわかづみ

令和五年九月 第九四号

- ◇ 村の景観と歴史・人物(13)
- ◇ 民具が語る生活史(民具②)
- ◇ 方言一考(おやす)
- ◇ モノ言うもの(行司装束)
- ◇ 歴史館行事の報告・お知らせ

村の景観と歴史・人物(13)

峠を越えた人たち④

町娘行方不明事件

渡辺伸栄

旧桃川峠の痕跡

かつての桃川峠は、今よりもっと朴坂集落寄りにあったといわれています。

地理院地図の最も古い大正二年地図に、その名残と思われる山道が書いてあります(地図)。



旧峠近くの四等三角点(標高314m)

五年前の古道探索会では、旧桃川峠の痕跡を探しました(写真)。人跡途絶えたその藪道が、かつては村上と関川をつないだ往来盛んな峠道だったのかもしれない。

人と情報がこの峠を行き交ったひとつの事件が、江戸時代にありました。

町娘が一人、行方不明に

天明三年(一八三二年)のことです。

村上町の目明しの家に奉公していた娘がいました。目明しといえば、十手持ちの親分、テレビでは銭形平次が、昔、有名でした。

その娘、目明しの親分から暇を出されます。つまり、解雇です。しかし、近くにある実家には戻らなかったのです。

数日経って、目明しの手下が娘の父親の所にきて、こう言います。娘は湯沢村にいるから、だれかを迎えにやった方がいいと。そこで、父親は次男を迎えにやりました。

ところが、次男が湯沢村に行ってみると、前の日に、娘は、湯沢村の男に連れられて村を出て行ってしまった後でした。

何日かして、その男は娘を金で売ったらしいという噂が伝わってきました。それで、目明しの親分が、今度は自分の手下を湯沢村に行かせて事の真偽を調べさせます。噂は本当のことでした。

娘の父親は、目明しに、何とかして娘を取り戻してほしいと頼みます。目明しの親分は手下を連れて湯沢村へ出かけます。ところが、娘を連れ出した男は村にはおらず、どこに行

ったか誰も分からないというのです。

数ヶ月して、その男が湯沢村に戻ってきたという話が、父親の所に届きました。間もなく、湯沢村のその男に頼まれたという村上町の男が、父親の所にやって来ました。そして、娘のことは金で済ませてくれないかと言います。

父親は、そんなわけにはいかないと断り、今度は、その村上町の男に長男をつけて、二人を湯沢村へ行かせます。

娘を連れ出した男は、湯沢村に戻っていました。そして、長男にこう言います。娘は十五両で新潟へ売ってしまい、その金は、仲間と分けたので、もうどうにもならないと。

父親は、こうなったからには、御上に訴えて、娘を取り返すしかないと意を決します。

村上町役場から村上藩へ

父親は、村上町の役場（町年行事所）に訴え出しました。

相手は湯沢村の男で、そこは幕府領ですから、水原の代官所へ訴えなければなりません。そのためには、父親の住む村上藩の添え状が必要なので、それを町役場から藩にお願いして、もらってほしいとの訴えです。

町役場は、事の真偽を確かめた上で、村上藩の役所（藩庁）へ、父親の訴え状を届けま

す。

数日して、藩の役人から町役場へ、藩の結論が言い渡されました。こんな内容です。

娘の居所が分からないというのならまだしも、新潟の居場所が分かっているのだから、まずは、そこへ行つて、娘を受け取ってくるべきで、御上に御苦労を掛けないようにすべきである。自分たちで手を尽くさずに藩に添え状を願ひ出るなど、あるまじきことである。藩からこう言われた町役場は、父親と父親の住む町の代表（町年寄）を役場に呼んで、藩からの回答を伝えました。

さて、その後はどうなったか・・・実は、この先の記録がなくて分からないのです。（以上の記録は、「村上町年行事所日記」巻十三）

村上藩の塩対応

村上藩の対応は何とも冷たいものでした。領民の保護は藩の責務です。これでは、あまりにもひどすぎるような気がします。

しかし、この事件の記録をよくよく読むと、藩の対応もやむを得ないのかもしれない。そもそも、この娘、目明しの家の暇を出されたのは、どうやら日ごろの行状に問題があったからのようです。それに、湯沢村の男の所へも自分で行ったようです。

湯沢村の男は、娘が来た時すぐに、目明しの手下に、迎えに来るように連絡を出していたのです。

しかし、手下から娘の父親への連絡がすぐにはつながらず、その間に、新潟へ行つてしまったということのようです。つまり、新潟行きは娘の意向も入っていたような感じがします。

この時代も、人身売買は御法度、厳禁ですが、紹介料や世話料とか前借とかの名目はよく使われていたようです。単純に犯罪とみなして行動するのを藩はためらったのかもしれない。

しかも、相手は幕府領。領主が違えば他国も同然。他国民の犯罪を訴えるには、証拠が不十分ということかもしれません。

江戸時代のネットワーク

さて、この事件に関わって、いったい何人の人が、村上町と湯沢村をつなぐ桃川峠を行き来したことになるでしょうか。

もし、暇があったら、ちよつと数えてみませんか。ぴったし当たっていれば、歴史館から景品がでるかも？です。

それで、皆さんのカウントには、伝言を頼まれたり、噂を運んだりした人たちは入っていましたか？ 車も電話もないこの時代、関

川村の湯沢と村上をつなぐ人々のネットワークというか情報網が、ちゃんと備わっていたのです。

それを思えば、目明しの親分にしろ娘の父親にしる、新潟とのネットワークも持っていたでしょう。それを使って娘を取り戻す算段をしたであろうことは、想像がつかます。

がしかし、娘が素直に戻ると言ったかどうか、そこは想像の外としか言いようがありません。

民具が語る生活史 民具の庚申講の掛け軸①

先日、ある方が庚申(こうしん)講の掛け軸をお持ちくださいました。作者は有磯周斎(ありそしゅうさい)です。周斎は稲垣八郎兵衛家の一員で、村上大工・工匠の系譜に連なる名工です。手がけた彫り物のあまりの素晴らしさに、村上藩主により名字と名前を下賜されます。藤基神社をはじめ、岩船郡内外に素晴らしい作品を残しています。絵は三条画人のひとり、五十嵐華亭に師事しました。

○庚申講の掛け軸 (明治4年、周斎67歳の作)



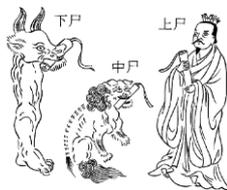
掛け軸は、ある時代までは万人が「庚申(講)の御軸だね」と認識していたものです。多くの集落には現在も庚申塔が残ります。この庚申信仰とは一体どのようなものでしょうか。

そもそも庚申は十干十二支Ⅱ干支(えと)のひとつです。甲・乙・丙・丁…という十干と、子・丑・寅・卯…の十二支の組み合わせは60通りあり、これを日や年にあてはめて使います。例えば今年(2024年)は十二支では卯年ですが、十干十二支では癸卯(みずのと・う)の年です。

道教では、人間の体内には三尸(さんし)という虫がいて、睡眠中にその人間の悪事を天帝に報告に行き、天帝はその多寡(たか)により、その人間の寿命を取り上げるといいます。見た目は全く虫らしくありません(左図)。道教では、この虫が体から抜け出ないように60日に一度の庚申の夜、みんなで夜を明かす「庚申待(こうしんまち)」の習俗がありました。

○三尸(さんし)…小児や馬の姿に似て、それぞれ頭部・腹中・下肢にいます。

巻物には天帝に報告する悪行が書かれている。(出典 精選版 日本国語大辞典)



日本に庚申待の習俗が伝わると、平安貴族の間に流行ります。江戸時代に入ると、庚申待のグループ講を作り、夜通し起きて過ごすことが民間にも広まりました。

関川村の多くの家では第二次大戦のころまで庚申講を行っていたようです。私の家(下土沢)では近隣の5軒ほどの家で講を作り、昭和42年の水害までは庚申講を行っていました。掛け軸は水害で失ったという事です。宿は持ち回りで決まり、その家に掛け軸をかけて講の成員で拝みます。大般若経をお唱えすると、庚申の真言をお唱えするとも聞きます。この日の献立は煮しめ、しそご飯やお茶、ご飯などの精進料理だったといえます。一方、村には「必ず魚を食べるものだった」という方もおられます。さて、日本に伝わり各地で広まった庚申信仰では、何をお祀りしているのでしょうか。

この掛け軸の中心に描かれる、鬼のような神様は青面金剛(しょうめんこんごう)です。病気を流行らせる悪鬼とされ、拜んで鎮める対象です。邪鬼(じゃき)を踏みつけ、六臂(ろっぴ)・六本の腕(うで)で法輪・弓・矢・剣・錫杖・シヨケラ(人間の女性)を持っています。お顔は忿怒相(ふんぬそう・怒りの表情)です。また、庚申の申(さる)が猿と結びつき、猿田彦(さるたひこ)神を祀ったり、「見ざる・言わざる・聞かざる」の三猿を祀ったりするところも出てきました。

庚申信仰は日本に伝わった後、その解釈により各地で様々な姿を見せます。掛け軸には他にも様々なものが描かれていますので、次号で庚申塔と共に触れたいと思います。(田村舞子)

方言一考・おやす

「おやす」は「終わらせる」の意味で全国に散見する方言である。「終やす」と漢字を当てることがもできる。例えば自動詞「増える」が他動詞化して「増やす」となるように、「終わる」が「終やす」となったと推測できる。また地方によつては「終わらせる」＝「物事を壊す」という意味に派生して使われるようだ。関川村は前者で、「早くおやすして飲みに行こう」と言えば「適当に切り上げて飲みに行きましょう」となる。一日二往復、新潟まで夫人の送迎が第二の人生となったK氏、生活のペースメーカーは夫人だが、実際のペースメーカーも体内に入っている。喋り過ぎとの因果は不明だが、十数年前に異常が見つかり、以来その機械の世話になっている。先般急に胸苦しくなり夫人に訴える。「そんなことより先ず私を送って！」と大変なライフワーク。秋風が吹き渡って、夫婦の理想という花卉がはらはらと散るような、私もなぜか胸苦しくなった。二つのペースメーカーに左右されながら、自分の人生を終やすのが早いか芍薬畑を繚乱の花園にするのが早いか、そんな思いで暇さえあれば荒川台で草むしりをしていく。彼の心に咲く花だけは、決して一陣の風に散らないよう、私は切に願うのである。(安久)

モノ言つもの・相撲の行司装束

戦前から戦後にかけて女川では草相撲が盛んに行われた。昭和十六年に県学童相撲大会で女川小学校が優勝、戦後の二十一年には郡学童の大会では初等科、高等科がともに優勝している。また、二十五年から二十七年にかけて岩船郡・村上市青年団体体育大会で女川青年団が三連覇を果たし、全国大会に出場する選手も出たのである。この隆盛を支えたのは大相撲経験者の立野良次郎であり、昭和二年に設立された女川相撲協会であった。その協会から寄贈された行司装束と力士の廻し等を今歴史館で展示している。当時百円の寄付を集めて制作したそうである。写真は行司の装束で、とんぼの図柄を大胆に入れた意匠である。とんぼは後ろに下がらず、真っ直ぐ飛ぶことから不退転、連勝を意味する縁起の良い虫として、勝ち虫とも呼ばれる。長渕剛の「とんぼ」もこのイメージで作られた歌だ。都会で成功するはずだった自分がんばりで、それが自分から遠く離れていくと切なく歌う。相撲も人生も勝ち続けることは難しい。八勝七敗で勝ち越せば上等である。 (安久)



歴史館行事の報告

○夏の美術館巡り 7月15日「椿寿荘・ユトリロ展」 8月5日「北方文化博物館・ヨシタケシンスケ展」無事終了 ○歴史講座 講師：佐藤忠良さん 第一回「岩樟舟夜話 関川村の伝説と歴史の関わり」 9月21日開講。第二回「名字と地名から見る郷土の歴史」は10月19日、第三回「関川村のインフラの歴史」は11月16日。19時より、歴史館映像ホール

歴史館行事のお知らせ・村民ギャラリー

◎秋の美術館巡り 10月21日「致道博物館・風間家住宅」、11月11日「山寺・慈恩寺(健脚の方)」 ◎古道歩き「出羽街道・大沢峠」 11月4日 ◎秋の健康登山「倉手山(小国町)」 10月28日 ◎出土品解説会「遺物からわかる当時の生活」 講師：齊藤準さん 10月14日、旧女川小学校 ○歴史講演会「渡邊家と米沢藩について」 講師：田村舞子 10月26日、村民会館大ホール ※要申込◎要参加費 ☆村民ギャラリー「平田大六 卒寿の履歴」小見生小見住の平田大六氏は今年12月で満90歳を迎えられます。若き日より水泳、そして登山に打ち込み、生涯の生業とした杜氏としても活躍なさいました。その一方で消防団や青年団など社会活動にも熱心に取り組み、それが政治家の道に繋がりました。多芸多才さで稀代の人物、平田大六氏の履歴を多数の資料で顕彰します。10月7日(土)・12月10日(日)、10・16時、観覧無料

いわかがみ 第九四号

発行日 令和五年九月

編集発行・申込 せきかわ歴史とみちの館

tel10254-64-1288 Fax0254-64-0300